

古代ギリシアにおける異文化理解の諸相（2） —ヘロドトスとスキュティア—

中澤 務*

Aspects of Cross-cultural Understanding in Ancient Greek 2: Herodotus and Scythia

Tsutomu NAKAZAWA*

[Abstract]

In this paper, I investigated the characteristics of cross-cultural knowledge of ancient Greeks, who understood non-Greek cultures through the concept of "otherness." Herodotus was a thinker who represented other cultures to Greek audiences through many techniques dubbed "the rhetoric of otherness." The most typical and important example is his description of the Scythians. For this study, the following five typical topics concerning Scythia, which were presented by Herodotus in the fourth book of his *Histories*, were analyzed with regard to his rhetorical techniques for representing the otherness of non-Greek cultures. (1) Descriptions of the king of the Scythians as the center of nomads. (2) The otherness of Scythian religion. (3) Explanations by Greeks concerning Salmoxis (the god of Getae). (4) Stories of Scythian intellectuals who crossed the border between Greece and other countries. (5) Descriptions of the Scythian expedition by King Darius.

1 はじめに

本研究の目的は、古代ギリシア人たちが異文化との接触の中で形成していった異文化理解の枠組みの特質と意義を明らかにすることにある。前号に掲載された論文において¹、筆者は、当時の異文化理解における重要な概念的枠組みの一つである「ノモス」と「ピュシス」という対概念を取り上げた。そして、この対概念が発生した歴史的文脈と、それが当時の異文化理解の文脈において果たした重要な役割を、ヒポクラテスやソフィストたちの思想の分析を通して明らかにした。今号では、その成果を踏まえつつ、当時の異文化理解を「他者論」の側面から特徴づけ、その特質を具体的に明らかにしたい。

ひとつの文化にとって、異文化とは「他者」であり、異質で理解しがたいものである。そのような異質な他者を理解しようとする努力の中から、異文化理解は生まれる。こうした他者との絶えざる接触は、古代ギリシア社会の一つの特質であった。というのも、小規模なポリスの中で、しかも限られた男性市民によって営まれていた古代ギリシア社会は、異民族、外国人、女性、奴隷といった多様な他者にさらされた社会だったからである。そのような他者たちの中で、古代ギリシア人たちは、いかに自己と他者の違いを認識し、自

* 関西大学文学部（Faculty of Letters, Kansai University, Japan）

1 中澤務「古代ギリシアにおける異文化理解の諸相（1）—ノモスとピュシス—」、*The Journal of Center for the Global Study of Cultural Heritage and Culture*, Volume 2 (2014), 127-139。

己のアイデンティティを確立していったのだろうか。古代ギリシア文明における、このような問題への関心は、1980年代に生まれ、急速に研究が進展していった。たとえば、ケンブリッジ大学のポール・カートリッジは、1993年に出版された著書の中で、古代ギリシア人にとっての他者の問題を総合的に考察した²。その中で、彼は、古代ギリシア人の心性を、自己—他者という両極対立に求め、その中に、彼らの文化の特質を探ろうとしている³。

このような点から注目され、再評価を受けるようになったのがヘロドトスである。というのも、ヘロドトスの記述と考察の中には、異文化を「他者」として見ようとする視点が濃密に存在しており、古代ギリシア人たちの異文化理解の特質が非常によく表れているからである。

ヘロドトスは、「歴史の父」と呼ばれ、その著書『歴史 (Historiae)』という題名もあって、一般的には歴史家として認識されている。もちろん、この著書の最大の目的はペルシア戦争の記録であり、その意味で彼を歴史家とみなす見方が間違っているわけではない。しかし、実際には、現代の歴史学の基準から見れば、彼が歴史家といえるのか否かは、微妙な問題なのである。というのも、彼の著作においてペルシア戦争の記述が始まるのは、全9巻のうちの第5巻からであり、それ以前の部分は、その前史である神話的伝承に基づく記述と、これに関連する周辺地域の民族や文化の記述が大半を占めているからである。それに加え、ペルシア戦争の記述においても、歴史的事実と神話的伝承の自覚的な区別がなされているとはいいがたいのである。そもそも、historia とは「探求」という意味であり、ヘロドトスは、歴史的な事実の記述と分析も含め、ペルシア戦争に関連するあらゆる事象を分析の俎上に上げ、その原因の探求を行ったのである。その意味で、彼の知的活動は、当時のソフィストたちの探求と共通するような総合的な文化研究であったと考えることができるのである。

本論文では、紀元前5世紀の古代ギリシアにおける異文化理解の様相を具体的に示すヘロドトスのテキストを取り上げ、そこにおいて、いかなる異文化理解の特質が表れているかを具体的に考察したい。とりわけ、本論文で注目したいのは、ヘロドトスによるスキュティアの理解である。スキュティアは、古代ギリシア人にとっては、世界の果ての辺境に位置する地域であり、そこに暮らすスキュタイ人たちの文化は、異文化の典型であった。ヘシオドスは、『歴史』第4巻において、ペルシア戦争の予兆現象ともいえるべき、ダレイオス王によるスキュティア遠征の顛末を詳細に描いているが(83-144節)、それに先立って、スキュティアの歴史、地理、風俗習慣について、詳細な報告を行っている(5-82節)。この部分におけるヘロドトスの描写には、彼の異文化理解の特質と、その描写の特徴的な手法がよく表れているのである。以下では、まず古代ギリシアにおける異文化理解とヘロドトスの歴史記述の特性をめぐる全般的な考察を行った後、4章以降では、ヘロドトスに取り上げている具体的なトピックをいくつか取り上げて、この分野に関する優れた研究であるアルトークの議論を手がかりとして⁴、考察を加えていくことにしたい。

2 Paul Cartledge, *The Greeks - A Portrait of Self and Others*, Oxford University Press, 1993. 日本語訳として、ポール・カートリッジ著、橋場弦訳『古代ギリシア人—自己と他者の肖像』、白水社、2001年がある。

3 このような視点からの研究は、わが国においても行われている。例として、地中海文化を語る会(編)『ギリシア・ローマ世界における他者』、彩流社、2003年を挙げることができる。

4 François Hartog, *Le Miroir d'Hérodote: Essai sur la Prerésentation de l'autre*, Gallimard, 1980. (英語訳として、François Hartog, Janet Lloyd (tr.), *The Mirror of Herodotus: The Representation of the Other in the Writing of History*, University of California Press, 1988.)

2 古代ギリシアにおける異文化理解のタイプ

古代ギリシアにおける異文化意識の発生と変化は、「バルバロイ」という言葉の誕生と、それが持つニュアンスの変遷と連動している。バルバロイとは、ギリシア語とは異なる言語を話す人々という意味だと考えられ、異文化に属する非ギリシア人を、ひとまとめに総称する言葉であった。それゆえ、この言葉は、ギリシア人—非ギリシア人という排他的な二項対立を作り出すのに都合のよい概念であったといえる。このような概念が登場するのは、紀元前 490 年に始まるペルシア戦争以後のことであり、それがペルシア戦争を通してのギリシア人たちの民族意識の形成と密接に関係する現象であったことは明らかであろう。

それ以前のギリシア世界においては、こうしたギリシア民族の対概念としての「異民族」という概念は存在しないか、存在したとしても、明確には意識されていなかったであろう。たとえば、ホメロスにおいては、「バルバロフォノイ」(バルバロイと同様、ギリシア語とは異なる言語を話す人々という意味)という言葉が一箇所だけ登場するのみで⁵、バルバロイという言葉は登場していない。また、ホメロスにおいては、ギリシア語を話す者と非ギリシア語を話す者の区別は明確に見て取れるが、それは必ずしも、ギリシア人と非ギリシア人の間の差別意識を示すものとはいえない。

異文化との本格的な接触がはじまる以前においては、異文化は、ユートピア思想の枠組みの中で理解されることもあった。ホメロス以降、ギリシア人の中には、ギリシア神話におけるオリュンポスの世界や、ヘシオドスに語られる黄金時代の記述など、ユートピアの観念を見ることができる。そのような観念は、空間的な遠方に投影され、「エリュシオン」や「至福者の島々」などの観念を生んだ。そして、そのような世界の果てに住むアイティオペス人、アビオイ人、ヒュペルボレオイ人といった、原始的状態にある人々を、高貴で正しい至福の人々とする見方が生じたのである⁶。

その後、本格的な異文化接触の時代を迎え、紀元前 6 世紀になって、「バルバロイ」という言葉が姿をあらわすことになる⁷。だが、この言葉が異民族に対する蔑視のニュアンスを最初から持っていたか否かについては、明確ではない⁸。蔑視的なニュアンスが生じるきっかけがペルシア戦争にあったことは間違いないが、しかし、ペルシア戦争勃発後も、しばらくは、そうしたニュアンスは薄かったのではないかと考えられる。たとえば、アイスキュロスは、悲劇作品『ペルサイ (ペルシア人)』において、ギリシア人に敗北したペルシア人の様子を描いているが、そこに登場する「バルバロイ」という言葉(ペルシア人を指す)をめぐるアイスキュロスの描写には、侮蔑的な意味合いを読みとることはできないように思われる。

しかし、異文化への蔑視の傾向は、着実に強まっていった。民主制期に入ると、上述のようなユートピア観は消滅し、異文化をギリシア文化よりも劣った原始的な社会とみなす見方が広まっていくことになる⁹。たとえば、エウリピデスの『アウリスのイーピゲネイア』には、「ギリシアが外国を支配するのは当然ですが、お母様、外国がギリシアを支配するのはふさわしくありません。何故なら、彼らは奴隷で、私たちは自由の民だからです (1400-1401 行)」という、よく知られた台詞がみられる。紀元前 5 世紀には、すでにこのよ

5 『イリアス』第 2 巻 867 行。

6 高島純夫「古代ギリシアの外人観」、弓削達・伊藤貞夫編『ギリシアとローマ』、河出書房新社、1988 年、315～317 頁を参照。

7 ヘラクレイトス DK22B107 (「目と耳は、バルバロイのような魂を持つなら、人間にとって悪しき証人である」)、ヘカタイオス FGh1F119 (「ギリシア人以前には、そこにはバルバロイが住んでいた」)。

8 高島、前掲書、314 頁。

9 高島、前掲書、316 頁。

うな、非ギリシア人に対する蔑視も存在していたことがわかる。

こうした見方は、紀元前4世紀になると、「汎ギリシア主義」といわれるナショナリスティックな自民族中心主義を作り出していく。そこでは、非ギリシア人は、明確に、ギリシア人よりも劣った、奴隸的な存在とみなされた¹⁰。

以上のように、古代ギリシアにおける異文化への態度は、異文化の理想化という側面と、異文化の蔑視という二つのタイプを見ることができる¹¹。しかし、これら二つの態度は、異文化に対する一方的なレッテル貼りをしている側面が強く、真の意味での異文化理解といえるのか疑わしい。では、これらとは異なる態度は存在しなかったのであろうか。筆者は、古代ギリシアには、これらとは異なり、異文化を理解しようとする姿勢も存在していたと考える。そのような姿勢が見られるのは、紀元前5世紀である。この時代は、本格的な異文化接触がはじまり、ギリシア人と非ギリシア人を区別する意識が芽生えはじめた時代であるが、まだ紀元前4世紀に見られるようなナショナリズム的傾向が生まれていない時代である。前号の論文で指摘したように、この時代は、ノモスとピュシスという対立的概念枠の中で、さまざまな異文化の特徴が相対主義的に考察された時代であり、文化相対主義の思想が芽生えた時代であった。

このような時代において、思想家たちは、どのように異文化を理解しようとしたのであろうか。以下では、そのモデルとしてヘロドトスを取り上げ、ヘロドトスにおける異文化理解の枠組みと方法を詳しく見ていくことにしよう。

3 ヘロドトスにおける「他者のレトリック」とスキュティア

3.1 ヘロドトスの生い立ちと異文化

ヘロドトスは、紀元前485年前後に、小アジア南西部のハリカルナッソスに生まれた。ハリカルナッソスは、紀元前6世紀半ばからペルシア帝国の支配下にあった。すなわち、ハリカルナッソスの位置していたカリア地方は、ペルシア帝国の総督が治める属州リュディア内にあったのである。ヘロドトスもまた、そうしたペルシア帝国支配の下で生まれ育ったことになる。

ハリカルナッソスは、イオニア地方に位置するドーリス系の植民市であったが、周辺の同様のギリシア人植民市と比べると、異質なところが多かったらしい。ただ、イオニア文化およびイオニア方言の影響は強く、これが原因となって、ドーリス系都市の連盟（六都市連盟）から除外されてしまったという。

また、ハリカルナッソスは、ほかの都市とは異なり、非ギリシア系の原住民であるカリア人との通婚が盛んにおこなわれていたらしい。ヘロドトスの家系も、父のリュクセスや、親戚のパニュアッシスと伝えられる名は、ギリシア語ではなく、原住民に由来するものと考えられる。ヘロドトスの血の中には、そのような非ギリシア人の血が混じっていたのである¹²。

ヘロドトスは、僭主リュグダミスの支配に対する叛乱に加わり、僭主の追放に成功するが、同胞市民の妬みを恐れて、サモス島での亡命生活を送ることになる。その後、彼はペルシア、エジプトなどを旅行し、ア

10 代表的な論者として、イソクラテス、クセノフォン、アリストテレスなど。cf. Cartledge, *op. cit.*, 51-77（日本語訳 73～114頁）

11 これは、必ずしも理想から蔑視へという一方向的な変化を意味するものではない。ヘレニズム期に入ると、ギリシア人と非ギリシア人の対立を強調する立場は、むしろ弱まっていった。高畠、前掲書、319頁を参照。

12 藤縄謙三『歴史の父ヘロドトス』、新潮社、1989年、348～351頁を参照。

テナイにも長期間滞在し、活動したらしい。また、彼は紀元前 444 年にアテナイの主導で建設された汎ギリシア植民市トゥリオイに移住した。そして、おそらくは、そこで亡くなったと考えられる。

以上のようなヘロドトスの生涯を見ると、われわれは、彼の生涯がいかに多文化的なものであり、彼がつねに異文化と接して生きていたことがわかるであろう。

3.2 ヘロドトスの記述の手法

ヘロドトスは、上述のような生涯のある時期に、地中海世界各地を旅行し、各地の様子を調査するとともに、そこに伝わる神話伝承や、その土地の社会・習俗などの調査を行っていったらしい。ヘロドトスは、その著作の中で、自分自身については、ほとんど何も語っていない。それゆえ、われわれは、ヘロドトスの旅行の時期や目的については、ほとんど何も知ることはできないのだが、その根底に、彼の生きた時代における知的風土が存在していたことは、明らかであるように思われる。すなわち、この時代は、ソフィストたちに代表される新しい知識人が登場し、新しい世界像と価値観を形成していった時代であった。その中で、異文化に対する強い関心が芽生え、民俗学的考察の原型が登場したわけだが、ヘロドトスもまた、この時代の知的風土の中で、みずからの経験を通して世界を探求しようとしたのではないだろうか。

ヘロドトスは、こうした調査の成果に基づいて、その著作を執筆していったのであろう。彼の著作は、神話的、民俗学的記述が中心に展開する前半部と、ペルシア戦争の歴史学的記述が中心に展開する後半部では違いがみられる。それゆえ、彼の著作の統一性をめぐっては、これまでもさまざまに議論されてきた。しかし、前半部の考察は、後半部の歴史的事件の原因を分析するための考察であるとみなすことができ、全体を一つの統一的な著作として理解することが可能であるように思われる。

おそらく、一連の著述は、一挙に書き上げられたものではなく、少しずつ書かれ、書き溜められていったものであろう。アルトークは、ヘロドトスがそうした著述の一部を聴衆に向けて朗読し、収入を得ていた可能性を指摘しているが¹³、同様の指摘を藤縄謙三もしており¹⁴、筆者もその可能性は高いと考える。その場合、ヘロドトスは、聴衆のギリシア人たちに対して、非ギリシア世界と非ギリシア人のことを語り、その関心を喚起することによって、他者としての異文化を理解させる作業をしていたことになる。アルトークが指摘しているように、『歴史』は、みずからの対極に位置する他者を映し出す「鏡」なのである¹⁵。

ヘロドトスは、異文化という「他者」をギリシア人たちに語り、異質なものを理解させるための様々な技法を持っていた。アルトークは、それを「他者のレトリック」と呼ぶ¹⁶。では、それは、どのようなものであったのだろうか。

13 cf. Hartog, *op.cit.*, 411-424 (英語訳 273-283)

14 藤縄謙三『ギリシア文化の創造者たち』、筑摩書房、1985 年、111～119 頁。

15 アルトークは、ヘロドトスの歴史記述を、「鏡」の比喻によって理解しようとする。ヘロドトスの記述が「鏡」であるというとき、そこには三つの意味が込められている。第一は、ヘロドトスのテキスト自体が鏡である。すなわち、ヘロドトスのテキストは、それを読む現代のわれわれにとって、自分たちのアイデンティティを映し出す鏡である。第二に、それは、テキストの読者や聴衆にとって、自らの対極である「他者」が映し出される鏡である。第三に、それは、ヘロドトス自身にとって、人間の住む世界とそこでのギリシア人と非ギリシア人による歴史の展開を描き出す鏡である。

16 cf. Hartog, *op. cit.*, 331-394 (英語訳 212-259)

ケンブリッジ大学のG.E.R. ロイドは、その著書の中で、初期ギリシアの思想を支配する二つの思考パターンを指摘した¹⁷。すなわち、対立思考（polarity）と類比思考（analogy）である。前者では、二つの対立的な概念軸が設定され、さまざまな事象が、その概念的対立を通して説明され、理解されていく。後者では、類比や比較やメタファーなどを通して事象が説明され、理解される。

ヘロドトスの説明方法も、このような方法の中にあるといえるだろう。このうち、重要なのは対立思考である。ヘロドトスにおける対立思考は、「ひっくり返し（inversion）」の方法として現われる。彼は、ある土地や文化の特性を説明するとき、それに対立する逆の特性を持つ土地や文化を取り上げ、それがひっくり返されたものとして理解するのである。

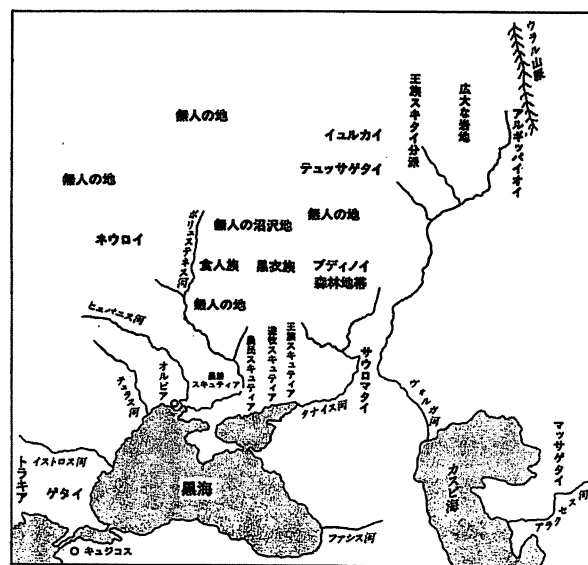
典型的な例として、エジプトの習俗の記述を挙げることができる。ヘロドトスによれば、エジプトの習俗は、エジプト独特の風土とナイル川の特異性ゆえに、他の民族とは、ほとんどあらゆる点において、正反対の風俗習慣を持っているという。たとえば、女は市場へ出て商いをし、男は家で機織をする。機織をするとき、他国では横糸を下から上へ押し上げて織るのに、エジプトでは逆にする。小便は、女が立ってし、男は座ってする、等々である（2.35）¹⁸。

3.3 スキュティアの記述

スキュティアは、古代ギリシア人にとっては、ホメロスの時代からその存在が知られていた地域であり（『イリアス』13.3-7）、紀元前8世紀のヘシオドスの時代には、その地理的状況もよく知られていたらしい（『神統記』339-345）。古代ギリシア人にとっては、みずからの居住地域からもっとも遠く離れた辺境であり、その文化は、みずからの文化の対極にあると考えられていた。それゆえ、スキュティアも、「ひっくり返し」の対象になりやすかったと考えられる。

こうした対極関係は、スキュティアとエジプトの間にも成立する。すなわち、ヘロドトスの説明では、エジプトは、世界で最も歴史が古く、最も古い知恵を持ち、暑い地域である。それゆえ、位置的にエジプトの対極にあるスキュティアは、世界で最も若い土地であり、最も知恵を欠き、寒い地域なのである。ヘロドトスの世界は、こうした対立的なシンメトリーで彩られている。

このような世界観を典型的に示しているのが、世界の地理的構造に対するヘロドトスの説明である。次の図は、ヘロドトスの記述から再構成された、ヘロドトスの世界である。これによれば、世界はヘラクレスの柱、タウロス山脈、デルフォイ、シケリアなどを通る中心線によって南北に分けられ、寒冷な土地と温暖な



ヘロドトスの記述に基づくスキュティアの世界

17 G. E. R. Lloyd, *Polarity and Analogy: Two Types of Argumentation in Early Greek Thought*, Cambridge University Press, 1966.

18 このようなひっくり返しによる特徴づけは、「ディッソイ・ロゴイ」などの当時のソフィスト文書にも見られ、ヘロドトスに限られない一般的な手法であったことがわかる。

土地に二分される。東西を分ける中心線（ギリシア人にとっての赤道）は、北方のイスタル（ドナウ）川と南方のナイル川によって規定される。二つの川は、同じ子午線上を流れ、いずれも（ギリシア人にとっての）南北の回帰線上で折れて、西に流れていく。エジプトは、リビュアとアジアの間に挟まれた中間地域であり、スキュティアは、ヨーロッパとアジアの間に挟まれた中間地域である。

こうして、ヘロドトスにとって、エジプトとスキュティアは、世界の中で、完全にシンメトリカルな位置付けを持つ地域であり、それゆえ、必然的に、あらゆる面で「ひっくり返し」が生じるのである。

ギリシアとスキュティアの間にも、同様の対立図式が成立しており、ヘロドトスは、つねにそのような対立を通して、スキュティアを特徴づけているとみなすことができる。以下、重要な対立軸をいくつか指摘しよう。

まず、「中心―辺境」の対立である。ヘロドトスにとって、世界の中心に位置しているのは、ギリシア人たちの居住地である。これに対して、スキュティアは、彼らにとって未知の世界である北方世界の果てに位置しており、ギリシア人たちの世界の向こう側にある世界である。

つぎに挙げるべきは、「農耕民―遊牧民（ノマド）」という対立である。じつは、スキュティア人には、遊牧を行う部族だけでなく、農耕を行う部族も存在しており、その点はヘロドトスの記述にも登場する。ところが、彼がスキュティアの風俗に言及するときには、つねに、遊牧民としてのイメージが色濃く反映するのである。

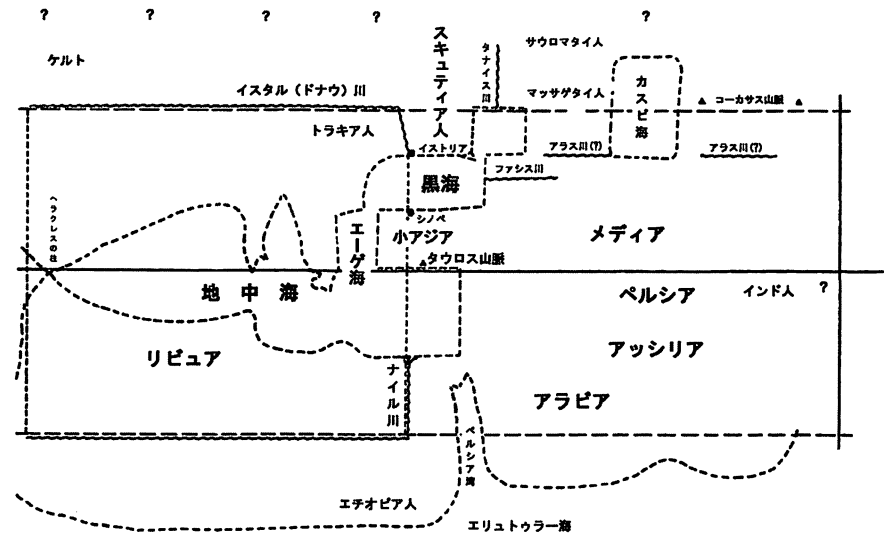
こうした遊牧民としてのイメージは、馬に乗り弓で戦う人々という、彼らのイメージにつながる。当時、アテナイでは、スキュティア人が弓兵として警護をしていたという。ギリシア人たちは、スキュティア人を、歩兵として槍を持って戦う自分たちとの対極に理解しようとしたのであろう。

4 王の身体と王家のかまど

以下では、ヘロドトスが記述しているいくつかの話題を取り上げ、そこにみられる彼の異文化理解の特徴を考察していくことにしよう。まずは、スキュティアの王をめぐる記述を取り上げる。

『歴史』第4巻68節に、スキュティアの王をめぐる、次のような記述がみられる（筆者による要約）。

王が病むと、最も高名な三名の占い師が呼び寄せられ、スキュティア古来のト占術で、その原因を占うのだが、たいていの場合、占い師は、国の人間の名を挙げて、その人物が王室のかまどにかけて偽誓を



ヘロドトスのシンメトリカルな世界
(アルトークによる図をもとに筆者が作成)

したためだと述べる。スキュティアでは、最も重大な宣言をするときには、王室のかまどにかけて誓う風習なのである。占い師によって名を挙げられた人物は、捕らえられて連行され、罪を問いただされる。その人物が否認すると、王は倍の数の占い師を呼び寄せ、占いの結果が同じであれば、その人物は首を刎ねられ、最初の占い師たちにその財産が分配される。だが、大多数の占い師たちが無実と認めると、最初の占い師たちは処刑されてしまう。

ここでは、王が国土や臣民に影響を及ぼし、それを豊かにするという通常の関係性が逆転し、臣民の偽誓が王の身体に影響を与え、病気をもたらすとされている。スキュティアにおいては、なぜ、このような逆転現象が生じるのであろうか。アルトークは、その意味を、「王家のかまど」が持つノマド的な特殊性に求めようとする。

第4巻59節では、スキュタイ人の祀る神々の記述があるが、それによれば、彼らが最も重んじているのは、かまどの神ヘスティアであり、それに続いて、ゼウスとゲー、さらに、アポロン、ウラニア・アフロディテ、ヘラクレス、アレスだとされている。ヘロドトスによれば、これらの神には、彼らの呼び名があり、ヘスティアはタビティと呼ばれているという（タビティとは、かまどの意）。ヘスティアに対する同様の重要性は、第4巻127節においても語られており、そこでは、スキュティア王のイダンテュルソスがダレイオス王に答えて、自分が主君として仰いでいるのは、祖先ゼウスと、「スキュティアの女王ヘスティア」しかないと宣言している。

しかし、このヘスティアの重視は、いかにも奇妙である。というのも、かまどは家の中心であり、家の固定性を象徴するものだからだ。家に定住しないスキュタイ人が、移動を象徴する神ヘルメスではなく、ヘスティアを信仰するのは、なぜなのだろうか。

われわれは、ここでのヘスティアは、個々人の家のかまどではなく、王家のかまどを象徴するものである点に注意する必要がある。王家のかまどは、国の中心であり、そうであるからこそ、重要な宣誓を行なう場となるのである。

ヘロドトスの記述では、王家のかまどは複数形であり、それは、かまどが複数存在し、王が移動していたことを示唆する。かまどは、国の地理的な中心ではなく、移動する遊牧民たちの社会的空間の中心なのである。

ヘロドトスによれば、スキュティアの王陵は、スキュティアの支配域で最も遠い境である、ボリュステネス河の遡航可能な限界点であるゲロイ人の国土に位置している（第4巻71節）。そのような場所に王陵が存在するのは、遊牧民であるスキュティア人にとって、国土には敵の侵入から守るべきものではなく、守るべき墓は最も遠くに位置すべきだからである。しかし、それだけではなく、そこには、中心から外れた周縁に中心があるという、スキュティア人のノマド性が表現されているのである。

このノマド性は、王の葬礼においても姿をあらわす。ギリシア人とは異なり、スキュタイ人は、王の遺体を車で運び、各地を移動していく。儀式は、言葉なしに沈黙の中で行なわれ、王陵に到着すると、王の家来たちの多くが一緒に絞め殺される。スキュティア王の死をめぐるヘロドトスの描写は、遊牧民としてのスキュタイ人の他者性の表現なのである¹⁹。

19 死をめぐる描写は、他者性の表現に密接に関わっている。ヘロドトスは、この点について、同じギリシア人の中にも他者性を見ようとしており、第6巻58～60節では、スパルタの王の葬儀が語られ、そこでもアテナイとの相違が強調されている。

5 スキュティアの宗教

スキュタイ人の信仰する神々と、その宗教的風習をめぐる記述も、スキュタイ人の他者性を際立たせている。ここでは、他者性の兆表として機能しているのは、欠如という現象である。

第4巻59節で述べられているように、スキュティア人の神は、ヘスティア、ゼウス、アポロン、アフロディテ、ヘラクレス、アレス、ポセイドンと極めて少数であり、しかも、ギリシア人が持っているような神々の系譜も欠落し、混乱している。

このような欠落は、スキュタイ人の宗教的風習の随所にあられている。

まず、スキュタイ人には、宗教におけるギリシア性の象徴である神像、祭壇、神殿などの宗教的な場が存在しない。第4巻108節におけるゲロノス人をめぐる記事において、ゲロノス人は、元来ギリシア人であったとされ、それゆえに、ギリシアの神々の聖域を持ち、そこには神像、祭壇、神殿が備えられているとされている。まさに、こうした宗教的な場を持つことこそが、ギリシア人であることの証であり、逆に、それを持たないことこそ、他者の証なのである。

スキュタイ人の行なう犠牲の儀式についても、その欠落性が強調される。すなわち、スキュタイ人の犠牲式においては、ギリシア人のそれとは異なり、火が焚かれず、祓いの式（犠牲獣の額の毛を切取って焼く）も、献酒も行われぬ。屠殺は、ギリシアにおけるように、のどを切って血を流すのではなく、絞殺によって行われる。こうしたギリシアの風習は、犠牲における獣の屠殺が、暴力によるものではないことを示すものであり、それを欠くスキュティア人の風習の暴力性が強調されているのである。

6 サルモクシスとは誰か？

宗教に関連する話題を、もうひとつ取り上げよう。ゲタイ人の神サルモクシスをめぐる記事である。ゲタイ人とは、黒海沿岸（現在のブルガリア東北部）に居住していた部族であり、彼らはサルモクシス（あるいはザルモクシスとも言う）という神を信仰していたという。このサルモクシス信仰については、エリアーデの研究が有名であるが、ここで注目したいのは、この異民族の神をめぐるヘロドトスの説明の手法である。

サルモクシスをめぐるヘロドトスの記述（第4巻94～96節）は、錯綜している。ヘロドトスは、まず94節で、ゲタイ人が靈魂の不滅を信じ、死者は神霊サルモクシスの許へ行くという信仰を述べ、ゲタイ人が、サルモクシスのもとに使者を送る風習を紹介する。しかし、95節になると、今度は黒海沿岸のギリシア人から聞いた話として、サルモクシスとは実は人間であり、ピュタゴラスの奴隷であったが、やがて神として信仰されるようになったのだと解説する。

サルモクシスをめぐるゲタイ人の信仰と、それをめぐるギリシア人たちの説明のギャップは、何を意味するのであろうか。アルトークによれば、94節で示されているのは、ゲタイ人の信仰に対するヘロドトスの純粋な記述的報告であり、ここでヘロドトスは、このゲタイ人の信仰を、他者の信仰として切り離し、距離を置いた描写をしている。ここで描写されるサルモクシスのアイデンティティは曖昧である。サルモクシスは「神霊」、すなわち神と人間の間の中間的なものとして提示されている。また、サルモクシスは、ゲベレイジスとも呼ばれるとされ、その名も一定していない。このように、サルモクシスは、一定した形を持たない、なにか曖昧な存在なのである。

さらにいえば、ヘロドトスは、すべての世界において、神はギリシア的な神のみだとする信念を抱いており、このゲタイ人の神を、神と認めていない。ゲタイ人は、雷鳴や稲妻があると天に向かって矢を放つという記述は、ゲタイ人がギリシア的な神を信仰しておらず、それゆえ、神そのものを認めていないということ

を示しているのである。

以上のような、「他者の神」の描写の後、95 節で、ヘロドトスはそのギリシア的な解釈を提示していく。それは、ヘロドトス自身の解釈ではなく、ゲタイ人の信仰を理解しようとする黒海沿岸のギリシア人たちの解釈であり、他者の神に接した黒海沿岸のギリシア人たちが、サルモクシスの理解できない他者性を最小化しようとして作った説明なのである。アルトークによれば、ギリシア人たちはエジプトを最高の知が存在する場所と考え、その対極にある北方の世界は、知についても最低の状態にあると考えていた。ピュタゴラスは、エジプトの知恵と関連を持つ。ギリシア人たちの説明では、サルモクシスが知恵を持つのは、そのピュタゴラスと親しんだからであるが、しかし、それは奴隷としてであった。ここには、エジプトの知恵がピュタゴラスに伝えられ、それがさらに質の低い知恵としてサルモクシスに伝えられるという、知恵の衰退が示されている。

また、サルモクシスの知恵は、ピュタゴラスの知恵に基づきながら、似て非なるものとして描かれている。95 節において、サルモクシスは、町の有力者を饗宴に招き、人間は不死であり、死後は、永遠の生を享けて、あらゆる善福に浴することのできる場所に行くと説いたとされている。これは、ピュタゴラス派における「浄福者の島」の思想を思い起こさせる。しかし、実際には、そこには、禁欲の思想が欠けており、その思想の本質を理解しないまがいものである。

7 辺境を踏み越える者の運命

ヘロドトスが描き出そうとするのは、スキュティアという、一般のギリシア人には接近不能な辺境の地である。そうした「他者の空間」としての辺境は、どのように描き出され、イメージされるのであろうか。アルトークは、辺境の地における異民族の人物をめぐる物語の描きかたから、その特質を明らかにしようとしている。

そのような人物として、ヘロドトスは、アナカルシスとスキュロスという二人の人物の物語を提示している。以下、それぞれの物語の概要をまとめておこう。

〔アナカルシスの物語〕アナカルシスは、スキュティアの王族に属する人物であり、後世では七賢人の一人に数えられることもある人物である。ヘロドトスによれば、このアナカルシスは、多くの国々を見物し、その才智を発揮した後、スキュティアに帰国した。そのさい、船でヘレスポントス海峡を渡り、キュジコスに上陸したとき、キュジコス人たちが「神々の母」なる神の祭りを催しているのを見て、自分が無事帰国できたら同じ祭りを催すと誓い、願掛けをする。帰国すると、彼はヒュライアの地の奥に入り、女神のための祭りをおこなう。ところが、これをひとりのスキュタイ人が目撃し、王サウリオスに告げる。王は現場におもむくと、矢を放ち、アナカルシスを射殺してしまう。(第4巻76・77節)

〔スキュロスの物語〕スキュロスは、スキュティア王アリアペイテスの息子のひとりであったが、父王が謀殺され、王位に就く。ところが、スキュロスは、スキュティア風の生活を好きになれず、ギリシア人の生母から受けたギリシア語教育ゆえに、ギリシア風に傾いていく。彼は、スキュティア軍を率いてボリュステネス人の町(オルビア)を訪れるたびに、軍を城外に残し、自分は城内でギリシアの服に着替え、スキュタイ人に見られぬように、ひとりで広場を歩き回っていた。また、ほかの生活様式もすべてギリシア風にし、犠牲もギリシアの流儀でおこなっていた。あるとき、スキュロスは、ディオニュソス・バッケイオスの宗教に入信したくなり、悪しき前兆があったにも関わらず、入信の儀式をおこなってし

まう。ところが、あるポリステネス人が、スキュタイ人たちにスキュロスが入信したことを伝えてしまふ。ディオニュソスの宗教を嫌悪していたスキュタイ人たちは、この事実を本国に伝え、スキュロスの弟オクタマサデスは、スキュロスに反旗を翻し、スキュロスはトラキアに逃亡する。オクタマサデスは、トラキアとの人質交換によってスキュロスを引き取ると、ただちに首を刎ねてしまった。(第4巻78～80節)

スキュティアに属するはずの人間が、その辺境性を忘却し、辺境の境界線を踏み越えて逸脱するとき、そこから悲劇が生まれる。それを引き起こしたのは、アナカルシスにおいては異国への旅であり、スキュロスにおいてはそのバイリンガル性であった。

アナカルシスとスキュロスの特徴は、スキュティアとギリシアというふたつの文化に同時に足をかけた両義性にあり、物語の随所に、その両義性が姿をあらわしているとアルトークは指摘する。

まず、アナカルシスであるが、彼は「ヒュライア」の奥地に踏み込み、そこで祭りを行った。ヒュライアとは、文字通り、木々の生い茂った土地のことであり、スキュティアの原野のイメージが反映している。そこには、キュジコスとヒュライアの重なりがあり、ヒュライアは、スキュティアの土地でありながら、それとは何か別の土地に変貌しているのである。

これと同様の土地の二重性は、スキュロスの物語についてもいえる。というのも、オルビアは、スキュティアの外部にあるギリシア人の都市だが、その内部はつねにスキュティアに監視されているからだ。

キュジコスもオルビアも、ミレトスの植民都市であり、ギリシア世界の末端に位置している。このような植民都市は、本土のギリシア人にとってみれば、異境との接点であり、境界の向こう側と重なり合った特殊な世界なのである。

さらに、この二つの物語は、いずれも宗教が重要な鍵となっている。すなわち、アナカルシスの物語では、「神々の母」という神が登場し、それへの信仰がもとで、彼は殺害される。スキュロスの物語では、スキュロスがディオニュソス・バッケイオスの信仰に入信し、その祭りに加わっているところをスキュタイ人に目撃されたことをきっかけに、反旗を翻した弟によって首を刎ねられる。

彼らが死の運命を招いたのは、スキュタイ人にとって、これらの神への信仰が、ギリシア文化のシンボルであり、スキュティアの文化コードに反するものだからである。では、なぜ、これらの神は、スキュタイ人にとって特別なものなのか。それは、これらの神が、多様で異質な文化コードが交錯する土地に存在する神であるからだとアルトークは考える。キュジコスとオルビアが、ギリシア人の都市でありながら、その末端に位置する、両義性を持った土地であったように、これら二柱の神もまた、ギリシア世界の末端に位置する両義性を持った神なのである。

「神々の母」とは、女神キュベレのことである。キュベレは、ギリシア語の名に翻訳できない異邦の神であり、キュジコスはこのキュベレと密接に関係し、信仰されていたという。他方、ディオニュソスは、ギリシア世界の外部のエチオピア、トラキアなどでも広く信仰されていた外来の神であり、ディオニュソスのカルトは、伝統的なギリシア宗教とは異質なものだといえる。

このように、アナカルシスとスキュロスの物語は、ギリシア世界と異境との境界線上において、ギリシアとスキュティアという二つの文化コードの重なり合いの中で生じた悲劇を描いたものなのであり、そのような場面におけるスキュティア人の振る舞いを描写することによって、スキュタイ人の異質性を説明しようとしたものなのだと考えることができるのである。

8 ダレイオスのスキュティア遠征

ヘロドトスは、スキュティアの地誌と習俗についての長い脱線を終えたあと、ダレイオス王によるスキュティア遠征の顛末を詳細に語り始める（第4巻83～144節）。

アルトークによれば、ヘロドトスは、このスキュティア遠征を、クセルクセス王によるギリシア遠征の前兆現象として捉え、ペルシア対ギリシアという対立を、ペルシア対スキュティアという対立に重ね合わせて理解しようとしている。すなわち、ヘロドトスが第4巻でこれほど詳しくスキュティアのことを論じるのは、それがペルシア戦争の序章的なスケッチだからであり、やがて来るべき戦争を理解するためのモデルだからなのである。

こう考えると、われわれは、二つの遠征に多くの平行性が見られることに気がつく。すなわち、いずれの遠征も報復のためになされたものであり、攻め込まれた側（アテナイとスキュティア）は、いずれも近隣諸国と同盟関係を結び、対抗しようとする。このようにして、二つの遠征におけるペルシアの対抗者であるアテナイとスキュティアの間に、今度は、重ねあわせが生じることになる。

このような重ね合わせを示す証拠として、二つの遠征におけるペルシア兵の特徴づけの違いを指摘することができる。

ペルシア戦争の描写において、ペルシア兵は弓兵である。盾と槍を持たずに戦う弓兵は、ギリシア人にとっては馴染みのないバルバロイの戦法であり、ペルシア兵は、「アノプロイ（重装歩兵でない者）」と表現されている。

ところが、スキュティア遠征においては、ダレイオスの軍は騎兵ではなく、歩兵としてイメージされており、いわば擬似ギリシア軍のように描写されているのである（46節）。これは、ペルシア対スキュティアという対立図式と、ギリシア対ペルシアという対立を、ギリシア的戦法対バルバロイ的戦法の対立として描写しようとしたものだと考えられるのである。

では、こうした視点から、スキュティアをめぐるヘロドトスの記述の特徴を見ていこう。ヘロドトスは、スキュタイ人たちを、なによりもまず、弓の技能に長けた、優秀な狩人として理解しようとする。この狩人というスキュタイ人の本質は、ペルシアとの関係におけるアテナイとスキュティアの類縁性を明らかにするとともに、アテナイにとっての「他者」としてのスキュティアを描き出す機能を同時に担っていると、アルトークはみなしている。

まず、アテナイとの類縁性を考えてみよう。スキュタイ人は、優れた狩人としてイメージされているが、ダレイオスとの戦闘では、逆に、ペルシア軍に狩られる獲物として描写されている。しかし、スキュタイ人は、優れた狩人であるがゆえに、隠れ、逃げることに長けている。それゆえ、ペルシア兵は、スキュティア兵を狩ることができない。直接会戦することを避けて、逃げ、隠れながら戦うスキュタイ人のイメージは、ギリシア人たちの共通知として確立しているものであり（例えばプラトンの『ラケス』）、ヘロドトスは、ペルシア人に対するこうしたスキュタイ人の戦略を描写することで、それを以下のようなアテナイの戦い方に重ね合わせているのである。

クセルクセスの侵攻に際して、アテナイがデルフォイの神託を伺ったとき、巫女は、町を捨て、地の果てに逃げるよう命じた（第7巻140節）。すなわち、巫女は、アテナイ人たちに、スキュティア的な戦略を取るように命じたのである。この神託に当惑したアテナイの使者は、再び神託を求める。すると、巫女は、攻め込んでくる騎兵たちから逃れ、木の砦に逃げ込むよう命じる（第7巻141節）。この神託の意味をめぐって、アテナイでは論争が生じるが、結局、木の砦とは軍船のことであり、神託は、海に逃れて海戦せよと命じているのだとするテミストクレスの解釈が採用され、アテナイは勝利を収めることになるのである。（同

様の事件は、ペロポネソス戦争においても起こっている²⁰。そこでも、ペリクレスの採った戦略は、家や土地を放棄して会戦を避け、海に逃れることによって、ポリスを守ることであった。）

このように、アルトークによれば、ヘロドトスは、ペルシアとの対立において、スキュタイ人をアテナイ人のように描き出している。しかし、他方で、スキュタイ人は遊牧民であるというイメージは、ポリスを持たない民という、ギリシア人にとっての他者のイメージを作り出すのである。

こうした他者としてのスキュティアのイメージは、辺境性というイメージによって表わされているとアルトークは言う。これを示すのが、ダレイオス王による「架橋」のイメージである。ダレイオスは、アジアを越えて、スキュティアの地に攻め込むにあたり、ヘレスポントス海峡を架橋し、さらに、イストロス河を渡るために、橋を建造する。このように、接近不能（アポロイ）であった辺境の地に通路（ポロス）が設けられることによって、こちら側とあちら側がつながれることになる。

ペルシア軍が河を渡ると、ダレイオスは橋を破壊するように命じるが、残しておいたほうがよいという意見具申があり、橋を残すことになる（第4巻97節）。結局、その橋は、スキュティアの地で戦いに破れ、退却するペルシア軍にとって、辺境から逃れる通路となったのである。

ダレイオスの遠征は、辺境という他者の空間への通路を求めたが、結局、他者の空間に届くことはなく、接近不能となったペルシア軍は、撤退を余儀なくされる。このように、スキュティアは、他者の住むあちら側の空間として捉えられ、その接近の不可能性が強調されるのである。

9 おわりに

以上、われわれは、ヘロドトスにおける異文化理解の枠組みとその特徴を、『歴史』第4巻におけるスキュティアをめぐる記述を中心に考察した。その結果、ヘロドトスの異文化記述が、二項対立や「ひっくり返し」などの「他者のレトリック」という手法を通してなされていることが明らかとなった。

ヘロドトスのこうした手法は、ギリシア人の伝統的な思考の枠組みに発しつつ、紀元前5世紀において成立した異文化理解の枠組みを基盤として成立したものだと考えられる。ヒポクラテス文書『空気、水、場所について』の記述との共通性からわかるように、彼の手法は、紀元前5世紀の典型的な異文化理解の枠組みだったのである²¹。

こうしたヘロドトスの異文化理解の枠組みは、自文化と異文化の対立の認識の中で、自文化を相対化し、世界全体を相対的な関係性の中で理解しようとする姿勢に基づいているように思われる。そのような姿勢は、当時の代表的ソフィストであるプロタゴラスの相対主義思想から生まれたものであり、ヘロドトスもその影響下にあるといえるだろう。ヘロドトスは、ソフィストの時代にアテナイで活動しており、プロタゴラスがアテナイで活動していた時期と重なる。プロタゴラスが、トゥリオイの建設に際して、その法律を制定するという重要な役割を果たしたという証言が真実であるとしたら、トゥリオイの移民団に加わったヘロドトスとも密接な交流があったのかもしれない。

ロザリンド・トーマスは、ヘロドトスをめぐる研究の中で、ヘロドトスを、イオニア地方で展開された紀元前5世紀の哲学やソフィスト思潮、あるいは医学（ヒポクラテス学派）との密接な交流と影響関係の中で活動した思想家として捉え、彼の歴史記述の手法を、当時の知的風土のコンテキストの中に位置づけようと

20 トウキュディデス 1.143 を参照。

21 中澤務、前掲論文を参照。

している²²。ヘロドトスは、まさに、紀元前5世紀のイオニアの知的風土の申し子だったのだといえるだろう。

本研究は、「文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成25年度～平成29年度）」によって行われた。

22 Rosalind Thomas, *Herodotus in Context: Ethnography, Science and the Art of Persuasion*, Cambridge University Press, 2000.